平成 19 年度喜多方市小学校農業科シンポジウム
中村桂子先生による基調講演「喜多方市小学校農業科に思うこと」の概要

1　はじめに（日経新聞に掲載された中村先生のコラムにふれて）

日経新聞には，専門外のことで常々自分が考えていることや大切だと思っていることを書くことができるコラムがあります。当時，小学校での英語教育が騒がれている時でもあり，自然と接したり遊んだりするだけでなく，人間の食べ物をつくる基幹産業である農業こそ小学校教育で大切にしなければならないという思いをずっともち続けていたこともあり，「小学校にこそ農業を必修に」というコラムを書きました。

しかし，実際には取り組むところはないだろうと思っていたところ，喜多方市で取り組むという喜多方市長さんからの手紙があり，その後いろいろな情報がメールで届けられるたびにわくわくしながらメールを見ていました。

2　小学校の英語教育とグローバリゼーション

なぜ，小学校に英語教育を取り入れようとしているのか。それは，グローバリゼーションの時代だから，英語を話せなければならないということです。それだけでなく，何でもいいから自分の立場を主張し，相手を打ち負かすというディベートの訓練が盛んに行われていいます。

言葉はそのような使い方をするのではなく，ディスカッション（話し合い）により，いいことを探す。あるいは，２人でじっくり対話し，ゆっくりとしっかり考えるために使うものだと考えます。

しかし，国の中心にいる人たちは，そのようなことを考えず，グローバリゼーションの時代は，英語を使って相手を打ち負かすことが大切だと考え，小学校に英語教育を取り入れようとしています。

3 中村先生の考えるグローバリゼーション

グローバリゼーションとは，グローブ化ということです。グローブとは地球のことです。月があって太陽があって地球があるという時の地球はアースと言います。人が住むところあるいは人が住んでいる地球という意味ではグローブと言うのです。つまり，グローバリゼーションとは，みんなが住んでいる地球という時がグローブなのです。

月周回衛星「かぐや」が映し出す地球が，なぜあんなに美しいのかと言えば，この地球にイネも含めて様々な植物たちが育ってくれているからなのです。

だから，グローバリゼーションとは，この地球に住んでいるみんなが上手に住めるような地球を考えることです。それまでは，喜多方にいれば喜多方のこと，少し広く考えても福島県のこと，あるいは日本のことを考えることで精一杯でしたが，今は地球のことが考えられるようになり，逆に言えば温暖化の問題などのことで地球ことを考えなければなら

なくなりました。

以前のグローバリゼーションはと言えば，経済のグローバリゼーションのことであり，みんなアメリカ化することでした。今そのようなことをやる時ではありません。

グローバリゼーションするためには，みんなが住んでいるこの美しい地球を大事にすることです。喜多方の人も，喜多方のことを考えるのと同時に地球のことを考えるというのがグローバリゼーションなのです。

そういう時に，まずしなければならないことは，それぞれの国に住んでいる人がみんなで地球の上で一緒に暮らすということを考えることです。

例えば，地球がなぜ美しい星なのかについて，全体のことをみんなが考えることです。植物があり，その中に生き物たちがくらしていて，その生き物の一つとして人間も一緒に暮らしています。

ところが，この美しい星にいる人間が，今から一万年くらい前に，ほかの生き物が決してやらなかったことで，自分で食べるものを自分たちでつくるという農業を始めました。その結果，ほかの生き物たちよりもたくさんの仲間が暮らせるようになり，ほかの生き物たちの数には限りがあるにもかかわらず，人間は少しずつ仲間の数を増やしてきました。そして，仲間を少しずつ増やしながらこの地球で暮らしていくはずであった人間が，1800年代のいわゆる産業革命により，工業というものを興した結果，便利になって急速に人口を増やすことになりました。特にこの 100 年で急激に人口が増え，60 億や 65 億と言われるようになり，もう少し立つと 100 億だと言われるような時代になってきました。

私は生命科学を専門としているので，生き物がこうような増え方をした時には，ある種の危険があると思うのです。

世の中一般に言われているグローバリゼーションは，アメリカを主導者として科学技術文明をこのまま伸ばしていき，お金をどんどん回して，どんどん便利にしていくことを続けて行こうとしています。しかし，それは不可能だと思うのです。

それをエネルギーという面で見ると，エネルギーもものすごく使っています。こういうことはあり得ないことであり，こういう類のグローバリゼーションは続かないということです。

そこで，もう一度生き物が暮らしているこの美しい星の中で，人間はどのように生きていくかという本当のグローバリゼーションをやるのなら，英語よりも農業を教えた方が本当のグローバリゼーションだという考え方でなければ，人間の未来はないと思っています。

4　生きるということ

20 世紀のグローバリゼーションは，「機械」と「火（エネルギー）」をどんどん使うことが優れた生き方だと考えられてきました。

その結果，人間は幸せになれたのでしょうか。新聞によると，現代の小学生は疲れている。時間が足りない。寝不足だという状態になっています。

そのような「機械とエネルギー」に追いまくられるような生き方よりも，「命と水」を大事にしていくという選択をするべきでないかと思っています。

命を大事にしましょうと言っても，なんだかよく分かりません。私自身も生命科学，生命誌を考えて「命って何」「生命って何」を考え続けてきましたがよく分からないし，これからも分からないだろうと考えています。しかし，生きているものが何をやっているかはわかるので，そのことを大事にした社会にしたいと考えています。

そのために，次の４つのことを大切にしたいと思っています。

【食べ物】

まず，食べ物がきちっとしいるということです。そして，おいしくて安心して食べられる食べ物を大切にするということです。そのためには，自分のところで作ったものが一番なのです。

しかし，現在日本はやたら外国から食べ物を買い込んでいます。日本のように緑豊かな美しい国が外国から食べ物を買い込むなどということはおかしいことです。お金の計算をするからそういうことになるのであり，生命を考えれば自分のところでつくるに決まっています。だから，産業で言えば農業を大切にしなければならないのです。

【健康】

二番目は健康です。だれもが健康になるための基本は，ちゃんとした食べ物を，ちゃんとした時に食べるということです。「朝ごはんをちゃんと食べましょう」などということもその１つです。そうすればメタボリック症候群にはなりません。

昔，アメリカに行っていた時に，どうしてこんなに太れるのかという女の子をよく見かけました。当時はそのような女の子は日本では見かけませんでした。しかし，ここ数年日本でも見かけるようになりました。そればかりでなく，発展途上国でもメタボリック症候群が増えています。飢えと同時にメタボリック症候群が存在しているということなのです。これは，アメリカ型のファストフードが世界中に広がり，食べ物がでたらめになっているということです。

だから，健康も基本は食べ物だということです。

【心と知】

３番目は「心」と「知」です。豊かな心としっかりした知恵があるということです。

人間は次の世代が素敵であって欲しい，あるいはよく育っていって欲しいと願い，それを伝えていきたいと願っています。小学生の発表の中にも，おばあちゃんに教えてもらい，それを６年生が１年生に教えた。思い上手に教えられたからよかった。という発表がありました。そして，今度分からなかったら高校生に聞くというようにずっとつながっていきます。これが教育であり，心と知を育てて行くことです。こうような教育が，生きているあるいは生命を大切にするということにつながっていくのです。

小学校で農業科に取り組む意義もここにあるのです。

【環境】

４番目が環境です。人間はその場所の空気を必ず吸うために，空気というものがとても大切になってきます。言い換えれば，生きているということは環境とやり取りをしているということになります。環境がしっかりとしていないと人間は生きられません。環境というのは，空気であり水であり，もっと大切なのが生き物たちであり，その生き物たちがしっかりと生きていてくれるということです。

しかし，いろいろな生き物が生きにくくなってきており，また人間も生きにくくなっています。だから，空気や水という環境，生き物たちがつくっている地球の環境，そしてもっと大事な人と人との環境がうまくいっているということが大切なのです。

生き物は１つで存在することはできません。人間もたった一人では生きていけません。他の生き物たちが生きていなかったら，人間も生きていけないのです。

この四つのことをしっかりと考え，このことをみんなが大事だと思えるような社会にしないと，21 世紀は続いていかないと思っています。

5　利便性と農業

20 世紀の社会は便利さを大事にしてきました。国も法律で利便性を高めることをめざし，便利な社会をつくろうとしてきました。科学技術が社会をつくり，車が走ったり飛行機が飛んだりしています。なぜこのようなことをするかと言えば，利便性を高めることがとてもよいことだと考えられているからです。

しかし，利便性と生き物のどちらを優先させるかを考えた時に，やはり生き物を先において考えていかなければなりません。だから小学生の時に農業をやると，生き物を大切にするということが分かるようになると考えています。

便利を考えてみると，物事が早くできて，手が抜けて，人間の思い通りにできるということです。

一方，農業は小学生の発表にもあったとおり，メロンを食べたいと思いメロンを育てたが，残念ながら思い通りにできなかった。だから，来年はこういうふうにしようと考えることが大切なのです。思い通りにならないから考える。思い通りにならないから我慢する。思い通りにならないことから，意外な発見がある。現在思い通りになることがよいことだと決めつけてすべてのことをやってしまうのではなく，思い通りにならないことのおもしろさや発展性，そこから考えるという姿勢が大切になってきます。

農業は，手はぬけない早くはできない，しっかりと時間をかけて手をかけないといけない，その結果やっと作物が実るというものです。それでも，思い通りにできないことがあり，また考えることが素晴らしいのです。

6 愛ずる

なぜ，小学校で農業をやって欲しかったのか。それは，単に農業を楽しんで欲しいのではなく，根本的に 21 世紀という時代を人間が人間らしく，地球環境問題などで暗い先行きにしないで，今の小学生が，そしてその小学生の次の世代が明るく暮らせるためには，小学校での農業というのは象徴でした。

地球のことを考え時，人間のことだけを考えていてのではだめです。地球上には 5000 万種類ぐらいの生き物がいて，その一つとして人間がいると思わなければなりません。

この 50 年間で，生き物はすべて細胞でできていて，その中にＤＮＡが入っていることが分かってきました。バクテリアから人間までそれが同じだということは，偶然に起こったことだとは考えられません。38 億年ほど前，地球の海の中で私たちの祖先となる細胞が生まれました。そこから，いろいろな生き物が生まれ，様々な生き物になってきました。その 38 億年の歴史を紐解き，この物語を読み解きたというのが，生命誌という私の仕事です。

大切なことは，人間がその物語の中にいるということです。38 億年の間，ほかの生き物と共有しているということです。

「虫愛ずる姫」というお姫様がいて，みんながそんな汚い虫を飼うのをやめなさいというのですが，飼い続けるのです。このお姫様が言うには，蝶になったらみんながきれいとほめるけれど，きれいな蝶になったらもうおしまいで，すぐ死んでしまうのです。本当に生きる力は毛虫の方にあるのだというのです。その生きている様子をじっくりと時間をかけてみているから，この蝶の本質が見えてきたのだと思います。

今の便利さは，早くやることや効率よくやることを求めて，遅い子や時間をかけた子どもをだめにしています。時間をかけてじっくりとやって，時には間違って考え直すことが教育では大切なのです。そうすれば物事本質が見えるようになり，この「愛ずる」という気持ちが生まれてくると思います。これは人間にとって，一番基本の気持ちです。

喜多方市の小学生は，農業を通してじっくりと時間をかけて取り組み，本質を見抜き，愛ずるという気持ちを持ってくれたのではないかと思います。